

「高松城下図屏風」を用いた授業展開の事例

高松市立玉藻中学校 教諭 筒井 大貴

1 実施学年 中学校2年生

2 学習のねらいと博物館の活用との連携について

(1) ねらい

香川県立ミュージアム所蔵の「高松城下図屏風」は、作者不明であるが1640年代の高松城下の景観を北西方向から見た鳥瞰図である。この絵画の最大の特徴としては、描かれている建物や町並み、生活している人々がかなり詳細に描かれている点にある。この絵画史料により、高松城下の人々の生活が分かることはもちろん、江戸時代の社会の在り方の一例として捉えることもできる貴重な資料である。また、「享保年間高松城下図」などの史料からもうかがえるように、この高松城下の町並みは身分により住み分けがなされている。そして、その特色は今なお町名として一部その性格を残している。これらの史料や情報から本単元で取り扱う「身分制の下での暮らし」において江戸時代の根幹をなす身分制社会を示す1つの教材として、「高松城下図屏風」を取り扱うことは効果的であると考えられる。

本実践では、「高松城下図屏風」を8分割したシートを活用し、8つのグループにそれぞれ1枚配布することで効率よく、そして丁寧に史料を見取ることができる。本来であれば、8分割ではなく全貌を一枚の紙か、インターネットを利用して「Google Art & Culture」で拡大しながら詳細に見ていくことが望まれるが、1人ひとりが全貌を明らかにすることで十分な時間数の確保と労力が必要になるため、本実践の流れとしては適切ではない。十分な時間の確保と環境を整えば、先述した方法等で「高松城下図屏風」を教材として活用したいが、今回は8分割したシートを活用することでの授業実践をしたい。

我が校の玉藻中学校は幸いなことに高松城跡と約3kmの距離にあり、その両地点の間に丸亀町や鍛冶屋町などの高松市街があるので、高松城のことや城下町のこと、地名や場所については他の高松市内の中学校と比べてもなじみがある生徒が多い。現地の写真や高松中央商店街を紹介することで、より教材と親しみを感じられるように工夫したい。もし、高松城やその周辺を実際に歩くことが事前に可能であれば、より多くの生徒が共通理解と親しみをもって本教材と向き合うことができると思う。その際、香川県立ミュージアムの学芸員の方との同行が叶えば、より効果的である。

(2) 活用した資料

- ・「高松城下図屏風」(香川県立ミュージアム貸出教材)
- ・「高松城下図屏風8分割シート」(香川県立ミュージアム貸出教材)
- ・高松市史編集室(1964)「新修高松市史 II」高松市役所
- ・香川県(1990)「香川県史 通史編 第3・4巻 近世」
- ・高松市(1961)「高松地名史話」
- ・角川日本地名大辞典編纂委員会(1985)「角川日本地名大辞典37」角川書店
- ・香川県立ミュージアム常設展示解説シート vol.106「城と城下町」
- ・パンフレット「高松松平家ご城下めぐり」(香川県観光協会発行)

3 学習指導計画(5時間)

- (1) 身分制の下での暮らし 2時間(本時2/2)
- (2) 安定する社会と諸産業の発達 1時間
- (3) 各地を結ぶ陸の道・海の道 1時間
- (4) 上方で栄えた町人の元禄文化 1時間

4 学習指導過程

	学習内容及び学習活動	資料	教師の支援及び指導上の留意点
前時	1 年貢を納める様子から百姓と武士について知る。	○『七難七福図巻』	
	江戸時代の身分制社会は、どのようなしくみだったのか		
	<p>(1) 資料からどのような身分の人が描かれていて、何をしているのか予想させる。</p> <p>(2) 支配身分と被支配身分があることに気付く。</p> <p>2 職人の姿を見ることで、町人の身分について知る。</p> <p>3 それぞれの身分についてまとめる。</p>	<p>○『富嶽三十六景 尾州不二見原』など</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・武士と百姓を見分けるポイントを分からない生徒には机間指導で以下の発問を行う。 ○百姓…何を量っているのかな。 ○武士…手に持っているものは何かな ・武士の特権や五人組について説明を行い、江戸時代がどのような社会であったのか考えさせる。 ・『富嶽三十六景』から桶屋などを見つけ、室町時代から職人や商人の身分が続いていることに気付かせる。
本時	1 「高松城下図屏風」から高松が城下町であったことを知る。	○『高松城下図屏風』	・『高松城下図屏風』を教室に掲示することで、興味を引く。
	高松城の城下町から分かる江戸時代の社会の特徴とは何か		
	<p>2 高松市になぜ丸亀町があるのか考える。</p> <p>(1) 資料をもとに予想する。</p> <p>(2) 個人→全体へと意見をつなげていく。</p> <p>3 町名からどのようなことが分かるか調査する。</p> <p>4 前時の身分制の振り返りを行い、『高松城下図屏風』を見て、町人地・武家地・寺社地の立地の特徴を調査する。</p> <p>(1) グループに分かれ、町人地・武家地・寺社地をそれぞれ色分けする。</p> <p>(2) 色分けした地図をつなげ、それぞれの身分から気付いた特徴をまとめる。</p> <p>(3) 全体で発表を行う。</p> <p>5 本時の学習のまとめを行う。</p>	<p>○丸亀城周辺の地図</p> <p>○一国一城令</p> <p>○生駒正俊の高松城入城について</p> <p>○高松市街町名一覧</p> <p>○高松城下図屏風 8分割シート</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・商店街の丸亀町グリーンを紹介することで学習内容への親近感をもたせる。 ・丸亀町という地名の由来に背景があったことを知ることで、他の地名の由来の興味をもたせる。 ・「鍛冶屋町」を紹介し、職人名が土地の由来になったことを確認し、高松市街の町名一覧から他にどのような職人町名があるのか調べ。 ・商人と職人がいたことから町人地が高松城の城下町には存在していたことを知ることで、前時の身分制について立ち返る。 ・町人地・武家地・寺社地を次の基準で見分けて色塗りを行わせる。 ○町人の館…暖簾があり区画がなく連続している。 ○武士の館…白い塀で覆われている。 ○寺社…樹木で囲まれている。 ・気付く特徴については「敵はどこから攻めてくるのか」などと発問し、寺社が防衛機能を果たしていたことにも気付かせる。 ・町人地が地名として残っており、城下町にはいろいろな職人や商人がいた。また、町人・武士・寺社は住む場所が区画で分けられており、江戸時代の身分制社会が反映されていることがわかる。加えて、寺社は戦の際の防衛拠点として機能を果たしていることも読み取ることができる。

5 予想される成果と課題

(1) 成果

- ・まず、地元教材である「高松城下図屏風」を用いることによる生徒の意識の高まりは期待される。先述したとおり、どこまで生徒が高松市街に精通しているかによるが、写真で紹介することや実際に赴くことでより効果的にできる。また、「高松城下図屏風」の8分割シートを用いた、パズル形式による組み合わせや、身分制による建物の見分け活動によって、普段の授業では難しい史料との対話が、より時間をかけて丁寧に行うことができる。座学になりがちな普段の授業の中で、歴史学・考古学を追体験させる授業は、授業のマンネリ化を防いだり、歴史分野本来の面白さを伝えたりすることができ、生徒の歴史分野に対する気持ちを高める効果があると考えられる。

(2) 課題

- ・今回の授業の流れにおける懸念は時間である。そもそもこの時間を確保すること自体も準備と計画が十分に必要であることに加えて、本時の流れもどの程度生徒が色分けや寺社の立地の目的にたどり着くか、クラスの生徒全員が目的を達成できるかという点に課題が出ると予想される。本時の授業の前半部分を前時に行っておくなどして、史料との対話に十分時間割けるようにしたい。
- ・今回使用するのは「高松城下図屏風」のみである。できれば多面的・多角的な史料の読解をさせるという点においては少し不十分である。「高松城下図屏風」を使った中世港町野原とのつながりや「享保年間高松城下図」などの史料を使える授業展開を今後の検討課題としたい。

(3) 博学連携の視点から

- ・学芸員の方と実際にふれあう機会を持つことで連携する意義はあると考える。教員も実際にミュージアムにどのような史料があるのか、近年の研究成果でどのようなことが分かったかを知る機会になる。また、最も意義のあるのは生徒が学芸員の方とふれあうことで、生徒の意識が変わる点にある。今回の授業でも事前の城下町散策や本授業での史料解説などを行ってもらうことでふれあうことが可能である。普段見ることがない史料をもとに授業が展開され、教員とは違った専門家が説明・解説を行うことで、生徒も自然と聞く耳を立てることは間違いない。また、普段から歴史に興味を持つ生徒はこの機会をきっかけにミュージアムへ足を運ぶことになる可能性も大いにある。